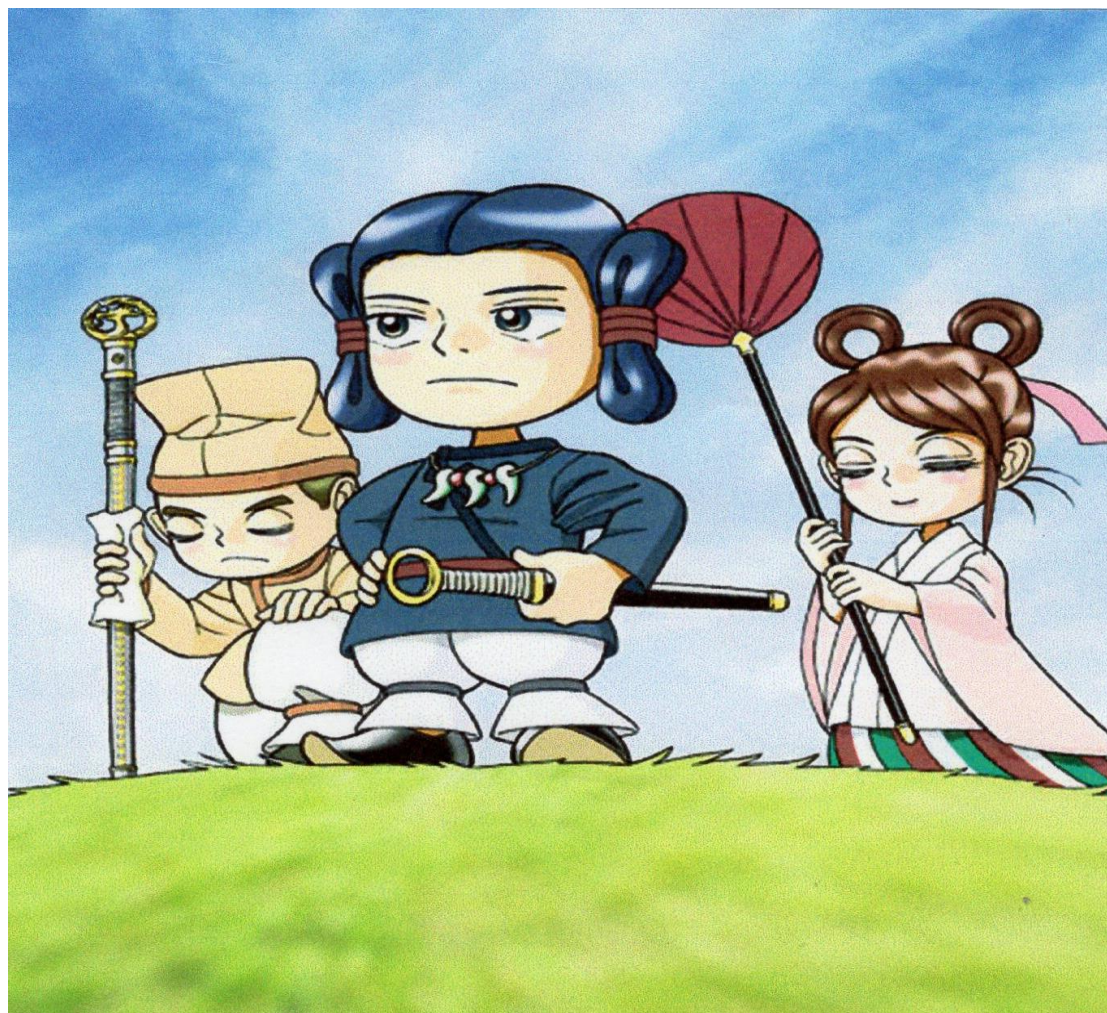


姉崎地域の歴史探訪

古墳時代から明治までの文化財について



ふるれんネット・いちまる館でダウンロードできます

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

旧称：能満の史跡を知る会

令和2年6月 編集・製作

目 次

1	・ 国造とは ・ 上総国の国造	1 P
2	・ 上海上国造について ・ 上海上国造の支配領域	2 P
3	・ 上海上国造の氏神 ・ 姉崎神社	3 P
4	・ 島穴神社 ・ 上海上国造の墓 ・ 古墳時代	4 P
5	・ 上海上国造の古墳群	5 P
6	・ 姉崎天神山古墳 ・ 釈迦山古墳 ・ 二子塚古墳	6 P
7	・ 関頭古墳 ・ 六孫王原古墳	7 P
8	・ 鶴窪古墳 ・ 山王山古墳	8 P
9	・ 鶴牧藩について	9 P～12 P

上海上国造と姉崎古墳群について

1・国造（国の御奴・くにのみやつこ）とは

大和時代に、朝廷により任じられた地方官の一つ。「国造」は大化以前の5～6世紀にわたって「伴造（とものみやつこ）」との対応で制度化された。7世紀の初め頃から大和朝廷は、地方行政組織である国県制度の一環として、以前からこの地方に土着し部民などを私有していた豪族を「氏姓国造」に任じたり、朝廷から派遣をしたりし、支配権を確立していった。

「国造」の支配した「くに」とは、大化以後の国よりは小さく、国の下の郡（こおり・評）に相当する大きさであったと思われます。地方では、大きな勢力を持ち、同族団を形成していた国造には「臣姓」が、九州中部、関東の国造には臣（おみ）・連（むらじ）・君・公（きみ）・直（あたえ）・造（みやつこ）などの姓（かばね）が与えられた。

国造は、大化の改新後、律令制によって廃止されたが、そこを治める地域の多くは国郡の郡を構成するようになった。しかし、旧来の国造は、令の制定によって、性識清簾で時務に与えるものが、その郡の大領、少領に、強幹聡敏で書算に巧みなものが主政、主張などに任ぜられ、令制の地方官として優先的に採用された。このように、大化の改新以後の新政府に於ては、国造の政治、経済上の地位はそのままで、国造の称号や祭祀権もそのまま公認され、職田に準じて「国造田」が支給された。

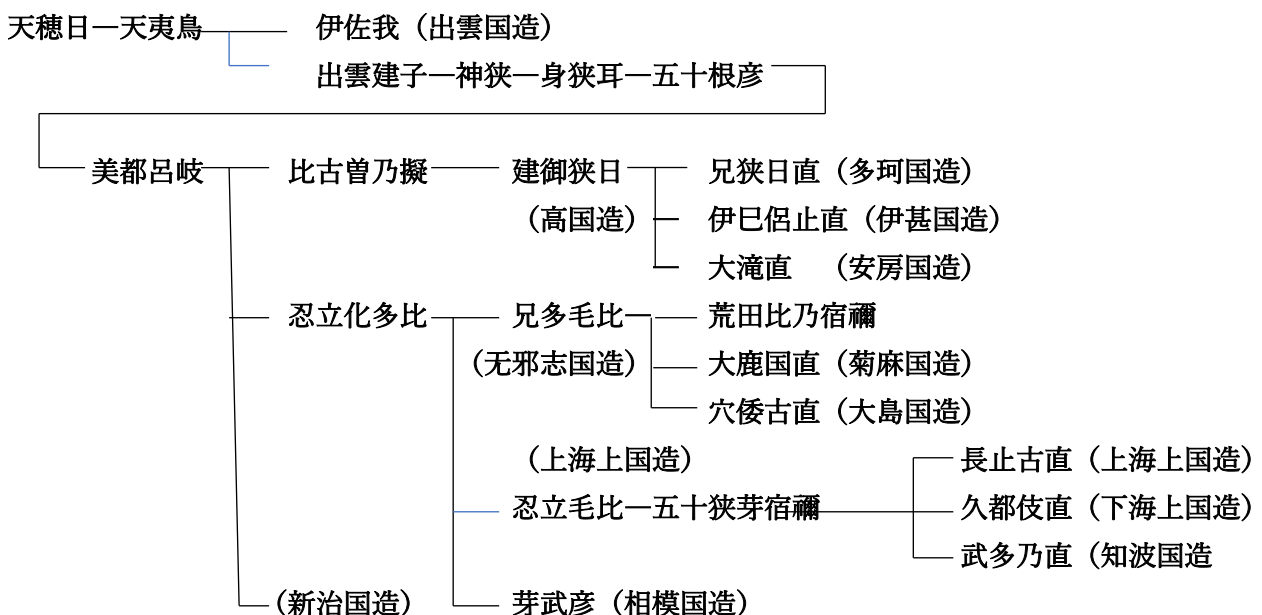
国造の職嘗は、国造国の支配で、子女を舍人（とねり）や采女（うねめ）として中央に出仕させることや屯倉（みやけ）を管理すること、馬や兵器など物品を貢納することなどの任務もあった。

最終的には、北は宮城県南部、新潟県北部から、南は九州、壱岐（いき）、対馬まで置かれ、総国数は120に達した。

2・上総国の国造

上総国には6つの国（須恵・馬來田・上海上・菊麻・伊甚・武社）が朝廷より造られ、そこにそれぞれ国造が任命されていた。その中で市原郡内には上海上国造と菊麻国造があり、他国よりも多く国造が置かれていました。これは本来海上国は1国でありましたが、6世紀に中央から進出した武社国造により分断されたため「上海上」と「下海上」となり、さらに、村田川流域の菊麻国造の台頭により衰退したと言われている。菊間国造は、上海上国造の一族と言われる「大鹿国直」との関係があると言われている。

「上海上国造の家系図」



3・上海上国造

上海上(上菟上)国造は、上海上国(現・千葉県中部の養老川流域)を支配したとされ、国造本紀(先代旧事本紀)によると、成務天皇(13代)の時代に天穗日命(あめほにのみこと)の八世系・忍立化多比命(おしたてけたひのみこと)を国造に定めたことに始まるとされる。また古事記によると天穗日命の子・建比良鳥命(たけひらとりのみこと)武夷鳥命・天夷鳥命・天日照命)に始まるといふ。出雲国造・无邪志国造・下海上国造等と同系の出雲氏または百濟から渡来した阿智使主(あちのおみ)の後裔・檜前舍人直(ひのくまとねりのあたひ)が国造を世襲したと考えられ、姉崎古墳群は檜前一族の墳墓と言われています。

① 上海上国造の支配領域

支配領域は、当時上海上国と呼ばれた地域、後の上総国海上郡、現在の市原市です。

領域の養老川流域には、出現期古墳(纏向型前方後円墳)である「神門古墳群」や、「王賜銘鉄剣」が出土した「稻荷台1号古墳」があり、古くから大和王権と緊密な繋がりがあったことが想定される。

また、「万葉集」にも「夏麻引く 海上瀉の沖つ渚に 船はとどめむ 小夜ふけにけり」と詠まれており水上交通の要衝であったと思われる。(青柳付近の港を読んだ歌です)

前項でも述べているが、当国造の領域と下海上国造の領域の間に武社国造の領域が入っているが、房総の国造制の展開には少なくとも2段階があったとされ、5世紀までは海上国は千葉県中部から茨城県から埼玉県、東京都にかけての1帯を支配する大勢力であったという説がある。しかし、五十狭茅宿禰(いだちのすくね)の子の代で「上海上国情」、「下海上国造」、「千葉国造」の3国に分離していることは、五十狭茅宿禰が「香坂王・忍熊王の反乱」に加担をして敗北し、そのために応神朝に分割されたと思われる。

その後6世紀頃に中央から進出してきた勢力により建てられた「武社国」によって上・下に分割された。養老川下流南岸の姉崎古墳群の姉崎天神山古墳は4世紀後半の墳墓で、全長130m程あり、5世紀前半に造営された釈迦山古墳は86mに続き、5世紀後半に造営された「姉崎二子塚古墳は103mあり、いずれも国造一族の墳墓とされている。



② 上海上国造の氏神

上海上国造の氏神は、式内社の島穴神社と姉崎神社とされている。



姉崎神社の大鳥居



姉崎神社の本殿

姉崎神社（延喜式内社）

上海上国造の氏神様で、権現造りの本殿は昭和61年に火災により焼失したが、その後再建された。歴史を見ると、創建は「古事記」や「日本書紀」によると、景行天皇の頃に「日本武尊」が東征の際に走水の海で暴風雨に遭ったが、妃の「弟橘姫が海に入水し犠牲となり、荒海をおさめた」ので上総の国に上陸出来たので、弟橘姫をしのび「風の神である支那斗弁命」を祀り創建されたという。また社伝では、大和武尊の死後に父である景行天皇が日本武尊の縁の地を歴訪し、姉崎神社に日本武尊を合祀したとする。さらに、成務天皇5年には、当地を支配していた国造の「忍立化比命が天児屋根命と塞三柱神を合祀したとするほか、履中天皇4年には忍立化多比命の孫の忍兼命を合祀したとする。姉崎一帯では、大型の前方後円墳を含む姉崎古墳群が分布しており、「上海上国造」の勢力の中心地と思われる。

伝承

地域の伝承では、姉崎神社の境内には、松の木が一本もありません。これについての伝承があります。それによると、狩り出たきりいつ帰ってくるかわからない夫の「志那都比古尊」を「支那都弁命」が思い、「待つのがつらい」と嘆いたことから、「待つ」に通じる「松」が姉崎地区では嫌われるようになつたという説と、支那斗弁命と志那都比古尊がこの地を訪れた際、姉神（支那斗弁命）の方が先に来て当地で弟神（志那都比古尊）を待ったので「あねがさき」という地名になったという。この時に「待つのはつらい」と言ったという伝承もある。

しかし、元々の地名は「姉が松」であったが、この地では姉妹がいる家では妹ばかり先に嫁いで行き、姉が実家に長く残ることが多く、「あねがまつ（姉が待つ）」という地名にその原因があると考えた人々が、姉から先に嫁に行けるようにとの願い



を込めて、地名を「あねがさき（姉が先）」に変えたという。そのために氏子は正月に松は飾らず、門松ではなく「門榊（かどさかき）」が飾られる。

島穴神社（延喜式内社）

養老川に近い島野地区に建てられています。

「島穴」の地名は、古代に駅が置かれており当時の駅は5里ごとに置かれており、馬を備え交通の役を果たしていた。相模の国府から船で天羽（現、富津）に上陸し、天羽―藤渚―島穴―上総国府のルートが駅の場所であった。姉崎神社同様日本武尊が東征のおり祈った結果海路の安全が確保できたので「風鎮神の志那都比古尊（しなつひこのみこと）」を祀る社を創建した。景行天皇が行幸のおり（127年）日本武尊と志那都比古尊を合祀した。社殿は過去に何度か火災に遭い、現在の社殿は平成元年に改築された。



島穴神社の本殿

4・上海上国造の墓

上海上国造であった「忍立化多比命（おしたてけたひのみこと）」が「天児屋根命」と「塞三柱神」を合祀されているのが姉崎神社とされおり、姉崎古墳群は姉崎神社を氏神として祀っていた本国造一族の墳墓とされます。

古墳時代

古墳時代は3世紀後半から7世紀前半にかけて続いた。姉崎古墳群も4世紀から7世紀にかけて造営されたとされています。当時の日本はどのような状況であったのか紹介します。

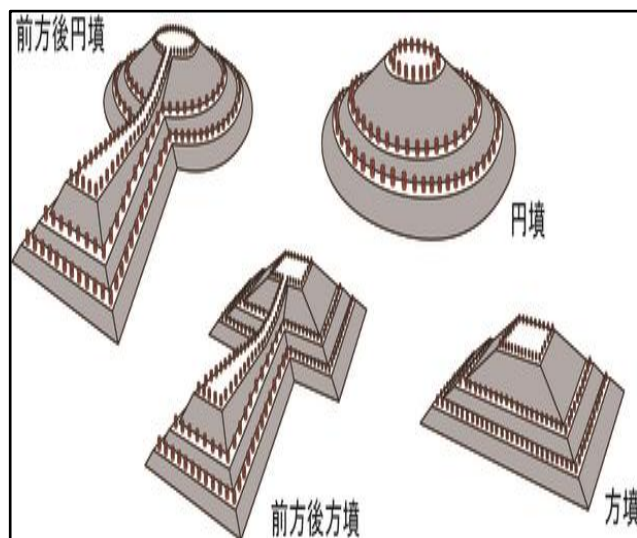
前方後円墳は3世紀後半に畿内、瀬戸内沿岸、北九州に造営されました。この中でも奈良県桜井市の「箸墓古墳」が有名です。前方後円墳は弥生時代の後期（2世紀後半）の大型墳墓の流れを汲むものではありますが、その形は日本独自のものです。

そもそも古墳は古代の墳墓という意味ですが、古くればいちの時代の墓でも古墳と呼ぶ訳ではありません。古墳時代の首長や豪族の墓だけを古墳と呼ぶのは、古墳が単なるはかに留まらず、被葬者の生前の力と権威を誇示せる政治的記念碑であったと思われる。また、古墳は次の代の首長や豪族の支配権と神的な権威を受け継ぐ、墓前での政権交代の儀式的場であったと思われる。

この時代は、畿内に「大和政権」が形成され、その覇権が確立した頃ですが、中央集権国家ではなく、その覇権の範囲は広域の政治連合的なものでした。

「大和政権」はこの地域に勢力を拡大するとともに、共通な葬送祭祀で各地域の首長との絆を強化していった。これにより前方後円墳が畿内、瀬戸内、北九州に造営されるようになった。

一方、東日本では前方後方墳の造営がさかんでしたが、これは東日本が濃尾平野に一大勢力を構える狗奴国（くぬのくに）の連合下であり、狗奴国の古墳造営の秩序に従ったものと思われる。



※ 狗奴国（くぬのくに）とは、3世紀に倭の国の一国。邪馬台国と対立し、「魏志倭人伝」によると男子を王とし、女王である卑弥呼とは不仲であった。

しかし、この前方後方墳も狗奴国が「大和政権」の配下になるに及んで前方後円墳に転換をして行った。4世紀後半になると出雲などの地方勢力の強い一部の地域を除き、ほとんどが前方後円墳となった。

5世紀は、巨大古墳の世紀と言われ、近畿地方では我が国最大の前方後円墳の「仁徳陵」（長径486m）をはじめとする多くの巨大古墳が造られた。これは「大和政権」で王権の世襲が確立されていき、幾世代もの盟主墓が造営された。またこの時代には、大王家は本拠地を移動することがあったため、王墓もその勢力の本拠地に造営された。このために大和・河内地方には大型の前方後円墳が残っている。地方においては「大和政権」を後ろ盾に、地域的首長連合が各地に造られ、その盟主権は持ちまわされ、その盟主墓として古墳が造営された。

5世紀後半に雄略天皇が即位し、王権が強化され律令国家への始動が始まった。雄略天皇は、埼玉・稻荷山古墳より出土した鉄剣の銘にある「ワカタケル大王」です。

さらに6世紀には国造制度が採られ、中央政権が強化されていき、これと共に地域首長連合は、中央豪族とその配下の地方豪族との体制に変わっていった。そのために盟主墓であった前方後円墳の造営はなくなった。これに替わり飛鳥時代には大型の円墳や方墳が出現してきた。

上海上国造の古墳群

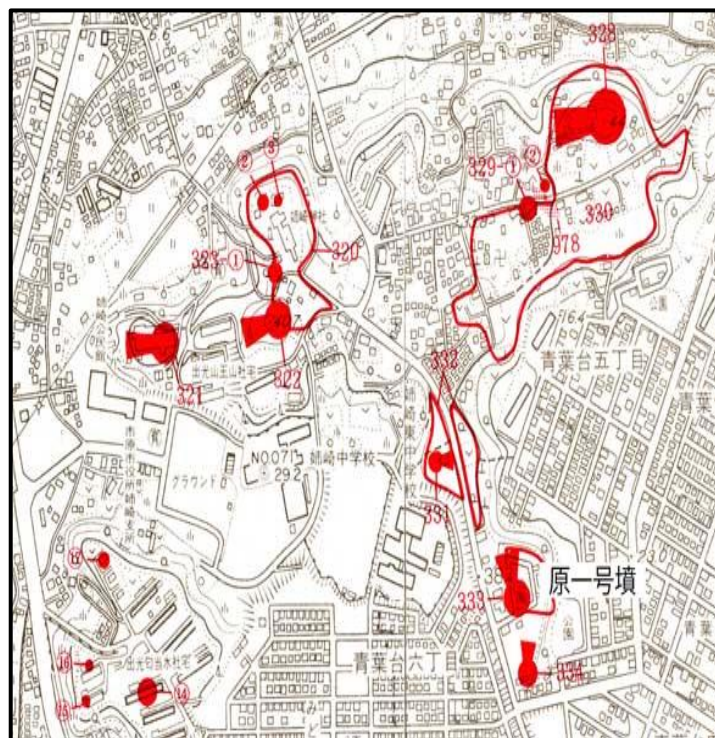
養老川流域の大部分が上海上国にあると思われる。成務天皇の頃に「忍立比多比命」が国造に定められ養老川流域の南地域を支配していた。その領域は、南は南総地域から高滝地域に及び、東は養老川周辺、西は君津郡境、北は東京湾に及び広範囲でした。

姉崎地区には内裏塚古墳群にも匹敵する大型古墳群の「姉崎古墳群」が築造されており、上海上国造の首長クラスの古墳が継続的に築かれた。最も古く築造されたものは「姉崎天神山古墳」と考えられ、以後、「釈迦山古墳」二子塚古墳—山王山古墳—一号墳—鶴窪古墳—堰頭古墳—六孫王原古墳と、4世紀から7世紀まで続く王家の谷とも言える地域です。千葉県また、今富塚山古墳や海保大塚古墳の大型古墳が低地の沖積地に築かれている。中流域では、佐是古墳群、吉野古墳群などが牛久地区を中心に築かれており、江子田金環古墳からはF字形鏡板、杏葉などの馬具が出土している。

江子田金環塚は、1963年に発掘調査された前方後円墳で、全長63m、前方部幅25m、高さ4.5m、後円部径26m、高さ4.5m。埋葬施設は、後円部墳頂に木棺直葬でした。純金製の耳輪2個が出土したことから「金環塚」と呼ばれる。

養老川右岸下流域の国分寺台では、神門古墳群、諏訪台古墳群、東関部多古墳群、山倉古墳群など多数の古墳があり、その大部分は調査された。

「王錫銘鉄剣」が出土して話題となった稻荷台1号墳や南向原古墳群などは、北部の菊麻国造との中間点にあり、独自の地域圏を形成したのかも知れない。



① 姉崎天神山古墳 (千葉県指定遺跡)

姉崎天神山古墳は、市原市姉崎にある古墳で、形状は前方後円墳です。姉崎古墳群を構成する古墳の一つで、築造時期は4世紀前半から中期ごろと思われる。古墳の規模は、全長128mで、高さが14m(円墳部分)です。本古墳のくびれ部には、後世に建てられた菅原神社(天神社)が鎮座しており、この古墳の名称の由来となっています。姉崎古墳群では最大規模のもので、前方を西方に向け、墳丘周囲では南側から東側にかけて周溝が廻らされている。発掘調査はされていないので、埋葬施設は不明で、埴輪などの遺物も得られていない。姉崎古墳群中では今富塚古墳に後続し、釈迦山古墳よりも先に築かれたとされている。



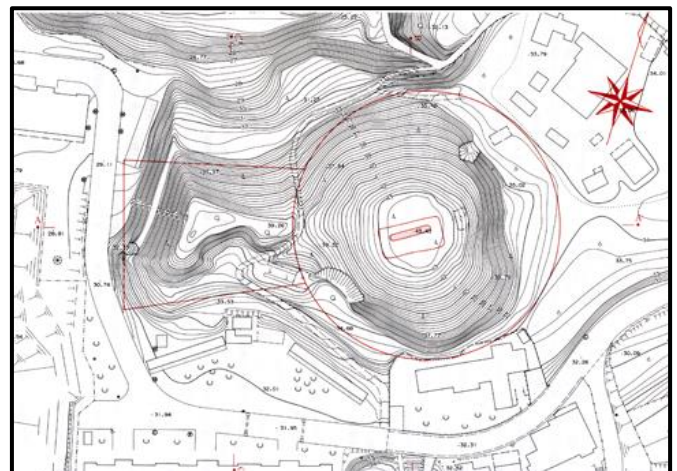
姉崎天神山古墳の遠景

② 釈迦山古墳

釈迦山古墳は、姉崎神社の南側の台地上に築かれた前方後円墳で、姉崎古墳群を構成する一基です。墳丘の全長は93mで、後円部の高さが12mに及ぶ。市原を代表する阿縣古墳の一つです。



姉崎神社付近の釈迦山古墳



釈迦山古墳の墳丘図 小林1996年より

1995年に墳頂部の調査が行われ、埋葬施設が全長9.1m、幅1.6mの粘土槨であることが判明。調査は、墳丘表面を対象にしたものでしたが、埋葬施設周辺から蛇紋岩製の管玉7点や土器の高杯などが出土している。出土土器の形状は古墳時代前期中頃の特徴を示しているため、釈迦山古墳は約1630年前に築かれたと考えられる。古墳の出現期から古墳時代前期までは、台地の上に造られていたが、古墳時代中期になると海岸平野に降りてきた。(二子塚古墳など)その後、古墳時代後期になるとまた台地の奥に造られるようになった。

③ 二子塚古墳

二子塚古墳は、全長が103m、前方部幅は52m、高さ8.5m、後円部径は50m、高さ9.5mの前方後円墳で、5世紀中期に築かれたと考えられます。前方部及び後円部の埋葬施設は木棺直葬で、両方ともすでに失われている。副葬品の中で、石枕(後円部より出土)は国の重要文化財に指定されている。

内部主体の副葬品などから、5世紀中ごろの築造とされています。住宅が墳丘のすぐ近くに建てられているので築造当時の姿を見ることはできませんが、当時周囲には盾形周溝（幅22～40m）が廻られおり、復元をすると全長160mの壮大な古墳とされる。天神山古墳とともに、当時の姉崎地域首長の大きな力を感じられる墳墓です。



④ 関頭古墳

関頭古墳は、7世紀初頭の築造の古墳で別名小谷古墳とも呼ばれ、青葉台の近くにあり全長46mの前方後円墳です。比較的規模は小さく、副葬施設は不明です。

⑤ 六孫王原古墳

六孫王原古墳は、7世紀後半の築造で、全長45m、前方部幅は25m、高さ1m、後方部幅26.8m、高さ2.5mの前方後円墳で、埋葬施設は横穴式石室（後方部南側）に造られた切石積です。出土品は、鉄刀や刀子片、砥石、金銅製鏡板、金銅製留金具、須恵器大壺などがある。市原市指定史跡に指定されており、1970年に発掘調査されています。

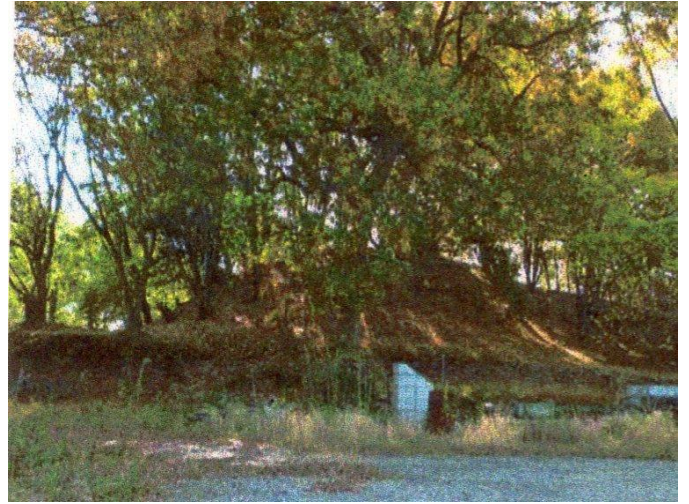


⑥ 鶴窪古墳

1981年に発掘調査された鶴窪古墳は、6世紀後半に築造された前方後円墳で、別名「連ヶ窪古墳」とも呼ばれています。墳丘は2段からなり、下段は南に少し張り出した台地を平坦に削り出し、その上に土を盛り上げて2段目の墳丘を形作っています。その形は後円部に比べて前方部が著しく大きく、古墳時代後期の特徴を示している。墳丘の長さは60m以上となり、姉崎古墳群の中では中程度の大きさです。

墳丘の裾には下総地方で作られたと思われる埴輪が並べられている。

鶴窪古墳の手前約150m右側には、「原1号・2号墳の前方後円墳」がありましたが、現在はすでになくなっている。

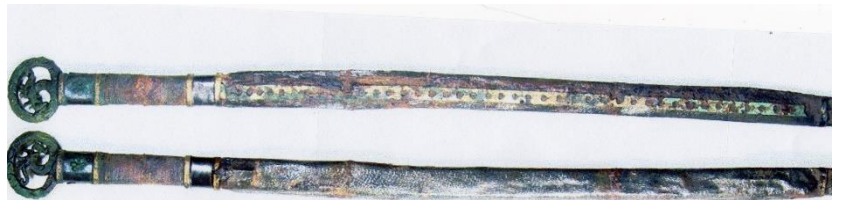


⑦ 山王山古墳

山王山古墳は、釈迦山古墳の西側に在り姉崎海岸が一望できる台地上にあります。現在は社宅として造成されて消滅しています。1963年に割烹旅館の建設に先行して発掘調査を行われました。

発掘調査の結果、6世紀中期の築造された大型の前方後円墳で、全長69mありました。建設工事途中のため、墳丘の高さなどは不明です。副葬品として出土した物は「金銀装単龍環頭大刀」や「金銀装表飾付胡ろく（矢を入れる容器）」をはじめ様々な副葬品が出土された。

出土品の「金銀装単龍環頭大刀」は、環頭部の楕円管が龍の胴体と脚を忠実に描かれており、髓円環の胴体からのびた単独の龍が、火炎を放射している様子が鑄造されている。また、柄つか部には、4か所の金銅装延金具がはめられ、縁金具の間には銀板の帯状金具が2か所に配置され、環頭寄りの銀板には6弁の花紋装飾が施されています。柄の握り部には、銀線が巻かれ、素晴らしい精巧な造りとなっている。



埴輪も1500点ほど出土しており、円筒埴輪のほか朝顔形埴輪、形象埴輪（人物や動物、器材など）の埴輪がある。後円部の墳頂中央からは、「粘土槨（ねんどかく）」と呼ばれる壁に粘土を貼った埋葬施設が発見された。そこからは、船形の木棺を据えた跡も確認されている。



後円部の主体部（埋葬施設）
中央部の葉巻形の部分が木棺の痕跡



出土した大刀の環頭部の龍の胴体部

鶴牧藩について 文政10年(1827年)～明治4年(1871年)

鶴牧藩は、江戸時代後期から廃藩置県まで上総国市原郡ににあった唯一の藩で、藩庁は鶴牧城(鶴牧陣屋)に置かれていた。

陣屋は、現在の千葉県市原市椎津地先。

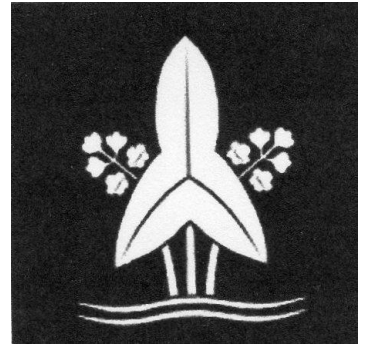
藩史によると、安房国北条藩主であった水野忠韶(ただてる)は、文政10年(1827年)5月19日に、上総国市原・望陀両郡に移封されたことから、鶴牧藩が立藩した。鶴牧藩と名付けたのは、水野氏の江戸屋敷が早稲田鶴巻町(今の新宿区)にあったことに由来する。

鶴牧水野家は忠韶(ただてる)・忠実(ただみつ)・忠順(ただより)と3代続き、この間、学問の振興に力を入れるなどの仁政を敷いた。

水野家は、徳川家康の生母伝通院(お大の方)の生家であり、分流には鶴牧藩、菊間藩、下総結城藩、出羽山形藩、紀伊新宮藩など、多くの親藩を出した名門です。

忠韶は市原郡椎津村1万7七千坪の城地に陣屋を建設する。城主格の大名であったことから、この陣屋は鶴牧城(鶴牧陣屋)と呼ばれた。

しかし、忠韶は翌年5月27日に68歳で死去し、跡を養子の水野忠実(酒井忠徳の次男)が継いだ。忠実は奏者番・西の丸若年寄などを歴任し、藩政においては藩財政再建のために倹約などの諸政策を講じたが、あまり効果がなかった。天保13年(1842年)1月19日に忠実は死去し、跡を嫡男の水野忠順が継いだ。明治元年(1868年)4月、戊辰戦争の時に鶴牧藩内の五井村で「五井村戦争」が起き、この不手際から同年10月に、安房国長狭や上総国夷隅・市原・埴生・長柄・山辺などの所領を上知され代わって上総国市原・望陀両郡に新たな所領を与えられた。翌年の版籍奉還で忠順は藩知事となった。そして忠訓は管制・軍制改革を主とした藩政改革を行ったが、明治4年(1871年)7月の廃藩置県で鶴牧藩は廃藩となった。



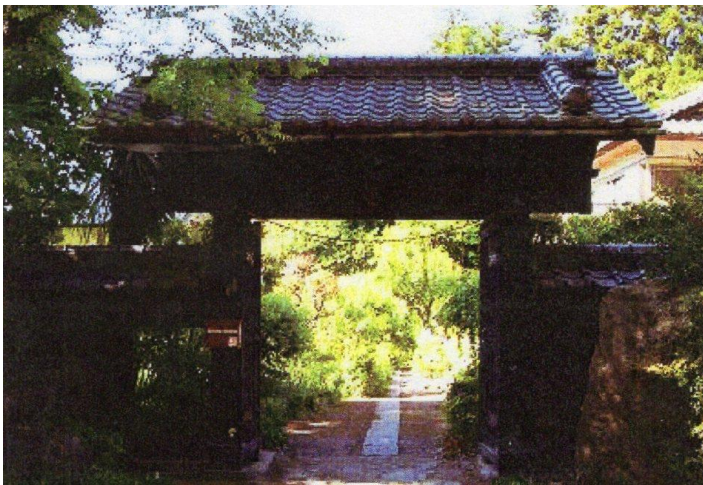
鶴牧藩校修来館跡地の碑



姉崎大手橋の正面が鶴牧藩陣屋跡



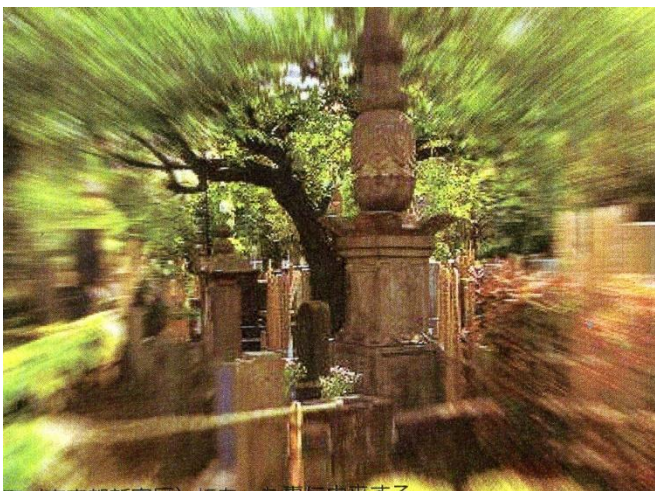
姉崎小学校正門前の鶴牧藩城址跡碑



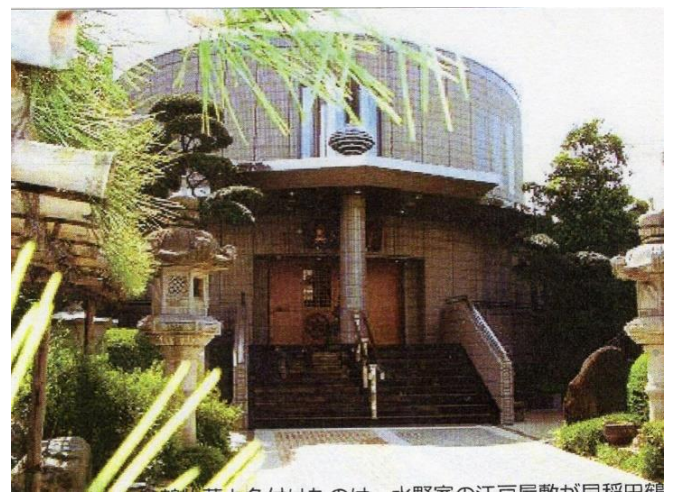
鶴牧藩の陣屋門（移築されている）



戊辰戦争の徳川義軍四士の墓



水野家の墓地



水野家江戸屋敷跡（東京新宿区）



広瀬蘆竹の描いた姉崎地区の行事や風俗、風習、伝承を描いた絵画

鶴牧藩の領地

明治元年の領地替えて、望陀郡 1 村と長柄郡 1 村を除いて領地が入れ替わっている。

幕末期

上総国

- ・ 望陀郡の内 1 村 (安房上総知県事を経て鶴牧藩に復帰)
- ・ 市原郡の内 1 2 村 (内 3 村は菊間藩、1 村が鶴舞藩、6 村が安房上総知県事を経て鶴舞藩に、1 村が菊間藩に編入)
- ・ 夷隅郡の内 1 村 (安房上総知県事を経て大多喜藩に編入)
- ・ 埴生群の内 1 村 (鶴牧藩に編入)
- ・ 長柄郡の内 3 1 村 (内 24 村が一宮藩、3 村が花房藩、2 村が鶴牧藩、1 村が安房上総知県事を経て花房藩に編入)
- ・ 山辺郡の内 1 1 村 (安房上総知県事に編入)

安房国

- ・ 長狭郡の内 5 村 (内 2 村が花房藩、3 村が安房上総知県事を経て花房藩に編入)
- ・ 朝夷郡の内 1 村 (安房上総知県事を経て長尾藩に編入)

廃藩時 (明治 4 年)

- ・ 上総国
- ・ 望陀郡の内 1 3 村 (旧旗本領 9 村、与力給地 1 村、安房上総知県事領 1 2 村)
- ・ 市原郡の内 1 村 (旧佐貫藩・西太平藩相給 1 村)
- ・ 長柄郡の内 2 村 (旧阿波上総知県事領 2 村、内訳は旧鶴巻藩領 1 村、旗本領 1 村)

